学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	渡辺（青木）　基子 【ライフサイエンス専攻　平成22年度生】	要　　旨
論 文 題 目	遺伝性疾患を有する子どもと共に生きること　―出生前検査の遺伝カウンセリングがもたらす効果―	2013年に無侵襲的出生前遺伝学的検査（NIPT）が日本で開始となってから、出生前検査の受検者数は増加している。出生前に子どもの遺伝性疾患が判明した場合、親には多くの葛藤や不安が生じ、子どもの出生前から出生後に至る包括的な視点が必要となることも推測される。遺伝性疾患を有する子どもと共に生きることに関して、特に出生前検査の遺伝カウンセリングがもたらす効果を明らかにすることを目的として、本研究は実施された。 まず、遺伝性疾患を有する子どもと共に生きる上での対人関係における親の困難を明らかにするために、コーテシー・スティグマの概念を用いた文献調査を行った。スティグマのある人と親密な関係をもつことでスティグマをもつに至った人のスティグマをコーテシー・スティグマと呼ぶ。遺伝カウンセリングの中で、親のコーテシー・スティグマの認識を軽減させるような働きかけを行うことは重要であるという知見を認めた。 さらに、NIPTを希望して遺伝カウンセリングに来談した妊娠カップルを対象とした質問紙調査から、遺伝カウンセリングは、妊婦だけでなくパートナーにとって知識の向上や気持ちや考えの変化をもたらすことを明らかにした。さらに、質問紙票の記述式回答の分析から、出生前の子どもの親にとって、遺伝カウンセリングが、遺伝性疾患に対するスティグマの認識を軽減させ、子どもの親としての認識に変化を生じさせる効果があることが示唆された。 さらに、ドイツにおける妊娠葛藤カウンセリングについて調査し、子どもが遺伝性疾患を有することが明らかになった場合についてカウンセリングの中で話し合うことや、各カップルに即した資料を提供できるように様々な種類の資料を用意することなど、日本において応用できる事項について検討をした。 本研究により、出生前検査の遺伝カウンセリングは、子どもの父親や母親にとって、気持ちや考えの変化、遺伝性疾患に対する考えの変化をもたらす効果があることが明らかになった。出生前検査の遺伝カウンセリングにおける子どもと共に生きることへの積極的な関わりは、子どもの出生前から出生後につながる連続した親としてのプロセスに重要な役割を果たすと考えられる。
審 査 委 員	（主査）　教授　三宅　秀彦	
	教授　松浦　悦子	
	教授　由良　敬	
	助教　四元　淳子	
	准教授（東京医科大学医学研究科）沼部　博直	